

## 健康相談活動に関わる養護教諭の資質・能力 — 適性感や自信の有無の視点から —

今野 洋子\*

### 要 旨

本研究は、小学校・中学校・高等学校等に勤務する養護教諭を対象とし、質問紙調査で、健康相談活動に関する意識等について聞いたものである。得られた結果は、以下のとおりである。

1. 調査対象者である養護教諭で、健康相談活動（心の問題への対応）に対する適性および自信のある者は約30%であった。
2. 健康相談活動に適性および自信のある養護教諭は、積極的に健康相談活動に関する研修を行っていた。

今後は、養護教諭の健康相談活動の力量の獲得と向上のために、現職養護教諭への支援が必要であろう。

### I. はじめに

養護教諭は、学校教育法第28条（中学校では第40条、高等学校では第50条で準用）に定められているように、「養護をつかさどる」職務を担っている。養護教諭のつかさどる「養護」とは、病気や健康の問題から対象に向き合うという「医療（看護）」ではなく、幼い子どもの心身の成長過程を支援する「教

育・保育」の機能ということである<sup>1)</sup>。「養護」は子どもの生活と寄り添い、深く関わりながら、「人間として育つ」過程にある子どもの、順調な心身の成長を支えていくことをねらいとする。それには、子どもの成長を阻害するさまざまな諸条件に対して、子どもの成長過程に寄り添いながら、子どもとともに改善していくことも含まれている。「養護」は、最も親密に子どもたちに近づける存在であり、身体のみならず、身体を通じてその心にふれることができる<sup>2)</sup>。

近年、子どもたちを取り巻く環境は、情報化の進展、科学技術の高度化など、社会の急速な変化に伴い、大きく変化してきている。環境の変化は、人間関係の希薄化等によるいじめや不登校・薬物乱用・性の逸脱行動といった現代的課題として現れ、子どもたちの「心の健康問題」に深刻な影響を及ぼしている。

このため、学校における子どもの心身の健康に関する専門的職種である養護教諭には、健康相談活動における能力が特に期待されている。健康相談活動の推進は、養護教諭の持つすべての資質を生かしてこそ、円滑に進むものである。

なお、本報告で使用する「健康相談活動」

\*浅井学園大学人間福祉学部福祉心理学科

とは、1997（平成9）年9月、保健体育審議会答申で提言された「養護教諭の新たな役割」において、「養護教諭の行う健康相談活動とは、養護教諭の職務の特質や保健室の機能を十分に生かし、児童生徒の様々な訴えに対し常に心的な要因や背景を念頭において、心身の観察、問題の背景の分析、解決のための支援、関係者との連携など心や体の両面への対応を行う活動」をいう。しかし、このことは、1997（平成9）年にこの「健康相談活動」という名称で使用される前から、実質的に、保健室の中で日常的に繰り返されてきた養護教諭のしごとであり、突然に確立されたのではなく、養護教諭の資質・能力として強調されたものと考えらるべきであろう。

また、この「健康相談活動」の資質・能力を獲得するため、1998（平成10）年7月の教育職員免許法の一部改正により、養護教諭養成カリキュラムの中に「健康相談活動の理論と活用」が新設科目として定められた<sup>3)</sup>。

このような経緯から、現在、「健康相談活動」に関わる資質・能力については、養護教諭の実践の場においても、養成の場においても、注目されており、研究も盛んに行われている。2005（平成17年）2月には「健康相談活動学会」が設立されるまでに至った。

一方、多様化する子どもの心身の問題は、学校教育および養護教諭の養護機能に大きな影響を及ぼしていると考えられる。改めて、養護教諭としての独自性を、健康相談活動に求める意義も大きい。

そこで、本研究では、「健康相談活動に対応する養護教諭の資質・能力について検討するための手がかりを得る」ことを目的として適性感と自信の有無について調べることとし

た。

## II. 対象および方法

研究期間は、2004年5月13日～8月6日とし、養護教諭を対象として質問紙調査を実施した。質問紙調査の実施にあたっては、集合調査と郵送による調査を併用した。431通配布した結果、243名から回答が得られ（回収率56.4%）、そのうち有効回答数は230通（有効回答率53.4%）となった。

質問紙作成にあたっては、後藤（1998）が「養護教諭が行う相談活動に関する一考察」<sup>4)</sup>（「後藤研究（1998）」と表すこととする）で、1996年に、北海道における児童生徒数500人以上の公立の小学校・中学校（スクールカウンセラー配置校および複数配置校は除く）の養護教諭253名を対象とした調査において使用した質問紙に加除修正を加え、使用した。なお、本稿においては、有意差の検定については、 $\chi^2$ を用いた。

なお、倫理的手続きについては、個人が特定されることがないように、質問紙および入力データの取り扱いに留意し、鍵のかかる部屋に厳重に保管した。調査対象者には、学術的な目的以外で使用しないことを約束し、研究終了後、質問紙は焼却処分した。

## III. 結 果

### 1. 対象者の属性および特性

対象者の勤務する学校の校種について見ると、小学校に勤務する養護教諭が128名（55.7%）、中学校勤務の養護教諭53名（17.4%）、高等学校勤務の養護教諭70名（17.4%）、盲・聾・養護学校勤務の養護教諭が2名（0.9%）、幼稚園勤務の養護教諭3

名（1.3%）であった。なお、小・中学校併置校勤務の養護教諭13名は、小学校勤務に含め、中・高等学校併設校勤務の養護教諭は、高等学校勤務に含めて解析した。

対象者の勤務地についてみると、北海道内の「市」に勤務する養護教諭は108名（47.0%）、町村に勤務する養護教諭は103名（44.9%）であり、都市部勤務と町村部勤務がほぼ半数ずつであった。

勤務年数は、「5年未満」が37名（16.1%）、「5～10年未満」が24名（10.4%）、「10～20年未満」が59名（25.6%）、「20～30年未満」が77名（33.5%）、「30年以上」が26名（11.3%）であった。平均勤務年数は、約17.3年であった。年齢は、「20～30歳未満」が45名（19.6%）、「30～40歳未満」が60名（26.1%）、「40～50歳未満」が81名（35.2%）、「50～60歳未満」が34名（14.8%）、平均年齢は39.2歳であった。

## 2. 心の健康問題を持つと思われる児童生徒への対応についての適性感

心の健康問題を持つと思われる児童生徒への対応について、養護教諭としての適性についてたずねた結果が、図1である（図1参照）。

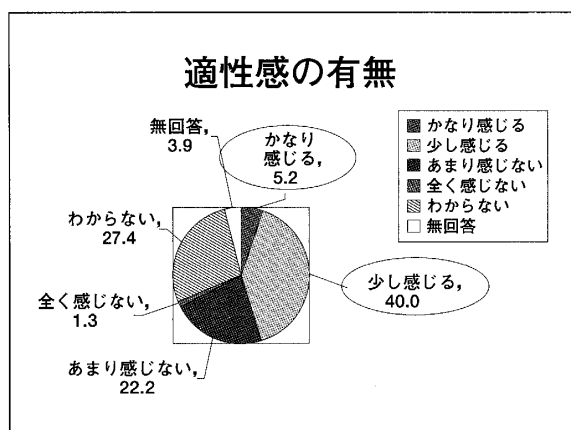


図1：適性感の有無

「心の健康問題を持つと思われる児童生徒への対応に適性を感じていますか」という設問に対し、「かなり感じる」と回答したのは12名（5.2%）、「少し感じる」92名（40.0%）、「あまり感じない」は51名（22.2%）、「全く感じない」は3名（1.3%）、「わからない」は63名（27.4%）、無回答9名（3.9%）であった。

「かなり感じる」「少し感じる」を合わせると、約5割の養護教諭が適性を感じていることがわかった。「あまり感じない」と「全く感じない」とを合わせると、2割の養護教諭が適性を感じていないことがわかった。

適性を「かなり感じる」と「少し感じる」とを「適性感あり」群とし、「あまり感じない」と「全く感じない」を「適性感なし」群とし、校種別および勤務年数別に比較した（図2・図3参照）。

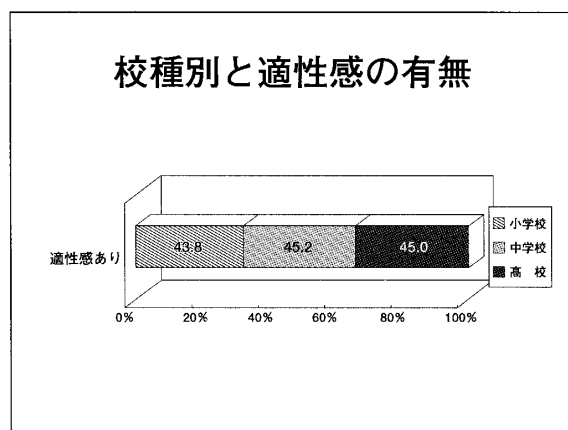


図2：校種別にみた適性感あり群

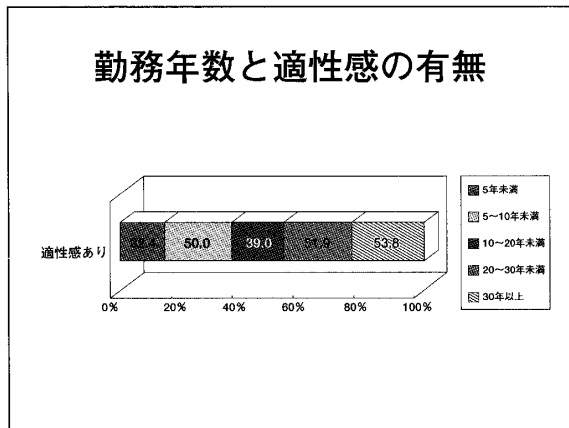


図3：勤務年数別にみた適性感あり群

「適性感あり」群は、小学校56名(43.8%)、中学校24名(45.2%)、高校18名(45.0%)であった。「適性感あり」群については、校種による有意な差はみられなかった。

また、勤務年数別に見た結果、「10~20年未満」で「適性感あり」群が減少するものの、全体的に勤務年数が増すと適性感あり群が増加する傾向がみられたが、勤務年数による有意差は見られなかった。

### 3. 心の健康問題を持つと思われる児童生徒への対応についての自信

心の健康問題を持つと思われる児童生徒への対応に関する自信の有無については、以下のような結果が得られた。

「対応には自信がありますか。」という設問に対し、「かなりある」と回答したのは3名(1.3%)、「少しある」と回答したのは74名(32.2%)、「あまりない」と回答したのは93名(40.4%)、「全くない」と回答したのは9名(3.9%)、「わからない」と回答したのは48名(20.9%)、無回答3名(1.3%)であった(図4参照)。

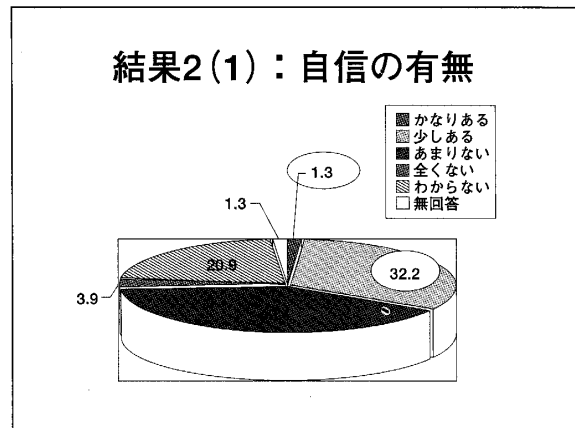


図4：自信の有無

自信の有無について、「かなり感じる」と「少しある」とを「自信あり」群とし、「あまりない」と「全くない」を「自信なし」群とし、校種別および勤務年数別に比較した。その結果が、図5および図6である(図5・図6参照)。

校種別にみると、「自信あり」群は、小学校で39名(30.4%)、中学校で17名(32.1%)、高校で17名(42.5%)となった。いずれも、有意な差は、見られなかった。

勤務年数と自信度の関連について見たところ、勤務年数別では「20~30年(未満)」の勤務年数の養護教諭が有意に高い結果となった。また、勤務年数の増加に伴い、自信を持って対応することができるようになるという傾向がみられたが、「30年以上」になると「自信あり」群の割合が減少した。

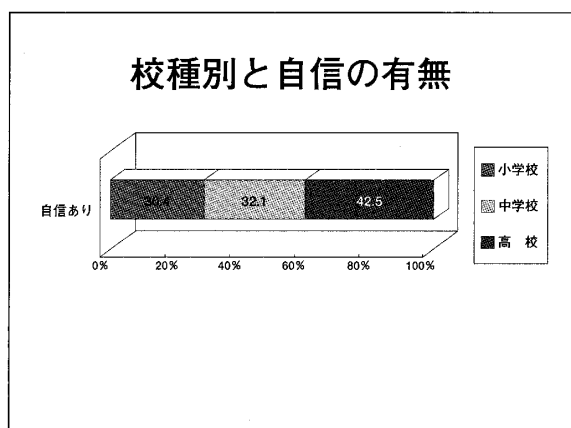


図5：校種別に見た自信あり群

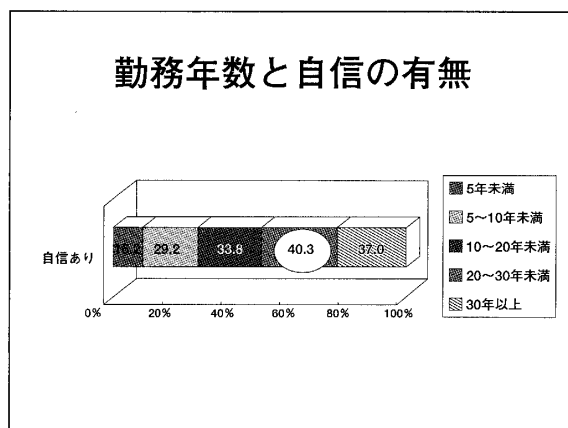


図6：勤務年数別に見た自信あり群

また、適性がありかつ自信があるという養護教諭は、67名で、全体の29.1%を占めた。校種別および勤務年数別に見た結果が、表1と表2である(表1・表2参照)。

#### 4. 健康相談活動を行う上での問題点

適性感や自信の有無の背景に関与していると思われることを探るため、健康相談活動を推進する上での問題点の有無をたずねた結果について、以下に述べる。

「現在、健康相談活動を行う上で問題点がありますか。」という設問に対し、「ある」と回答したのは160名(69.6%)、「ない」と回答したのは64名(27.8%)、無回答6名(2.6%)

であった(図7参照)。健康相談活動を実施する上で、問題点があるとする養護教諭は、全体の約7割を占めた。

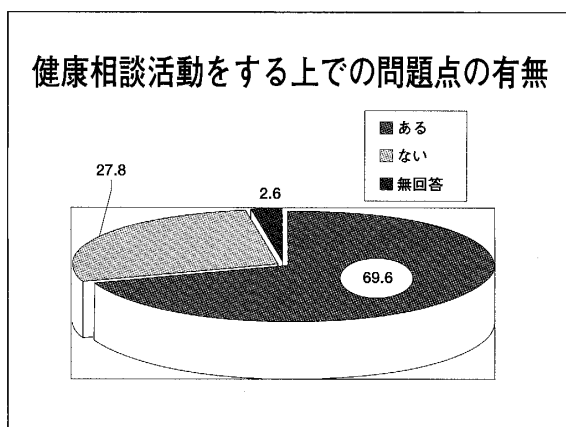


図7：健康相談活動を行う上での問題点の有無

表1 心の問題に対する適性感と自信

	人数 (%)		
	小学校	中学校	高等学校
適性および自信がある	34 (26.6)	15 (28.3)	14 (35.0)
有意差			

表2 心の問題に対する適性感と自信

	人数 (%)				
	5年未満	5~10年未満	10~20年未満	20~30年未満	30年以上
適性・自信あり	5 (13.5)	7 (29.2)	18 (30.5)	26 (33.8)	9 (34.6)
有意差	*				

\* :  $p < 0.05$

問題点の有無と適性感との関連を見たところ、「適性感あり」群の養護教諭104名中、問題点があると回答したのは72名（69.2%）、「適性感なし」群の養護教諭54名中、問題点があると回答したのは48名（88.9%）で、「適性感なし」群の方が有意に高い（ $P < 0.001$ ）結果となった（図8参照）。

次に、自信の有無から比較したところ、「自信あり」群の養護教諭77名中、問題点があると回答したのは51名（66.2%）、「自信なし」群の養護教諭102名中、問題点があると回答したのは82名（80.4%）であった。『なし』群の方が、問題点があると回答した養護教諭の割合が高かったが、有意な差は見られなかった（図9参照）。

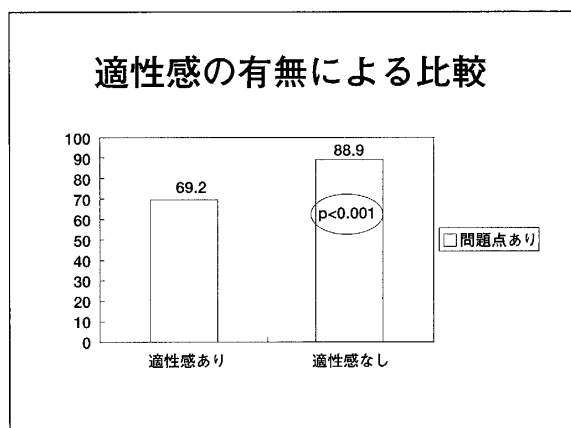


図8：問題点の有無と適性感の有無との関連

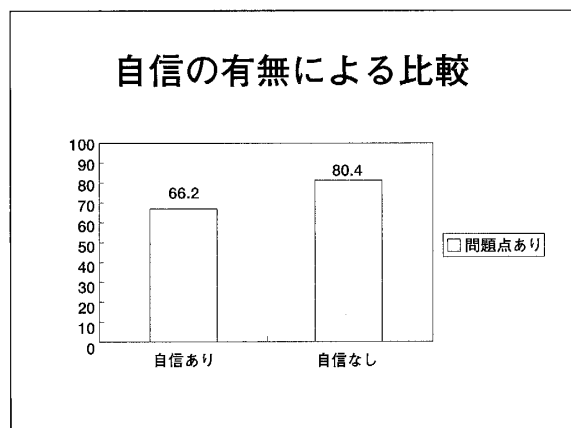


図9：問題点の有無と自信の有無との関連

問題点の具体的な内容を知るために、問題点があると回答した160名に、「それはどのようなことですか」と11項目の中から複数で選択させたところ、最も多くあげられたのは、「カウンセリングの技術や知識の不足」79名（49.4%）であった。次いで、「時間の余裕がない」58名（36.3%）、「保健室来室者が多い」48名（30.0%）、「校内の連携が不十分」28名（17.5%）、「心の問題に対する他教師の理解不足」23名（14.4%）、「相談場所がない」・「心の問題に対する保護者の理解不足」が各20名（12.5%）、「専門機関が近くにない」18名（11.3%）、「その他」11名（6.9%）、「子どもとの信頼関係を築くのが困難」9名（5.6%）、「研修を受けられない」7名（4.4%）、無回答2名（1.3%）という順であった（図10参照）。

「その他」では、「自分の知識が不十分であり適切な対応ができていないのではと不安に感じること」、「保健室がない」、「自閉症、ADHD、LD等発達障害が疑われる生徒やコミュニケーションが難しい生徒が多く、ほとんどの生徒が何らかの問題があるため何から取り組むべきか迷っている」、「保護者との連携が取りにくい」、「自分自身に精一杯で心に余裕がない」、「どれだけ子どもの心に寄り添えているか」、「不登校の場合」等の記述が見られ、子どもの問題の多様化に伴う対応や支援ができないことを問題点としてとらえていることがうかがえた。

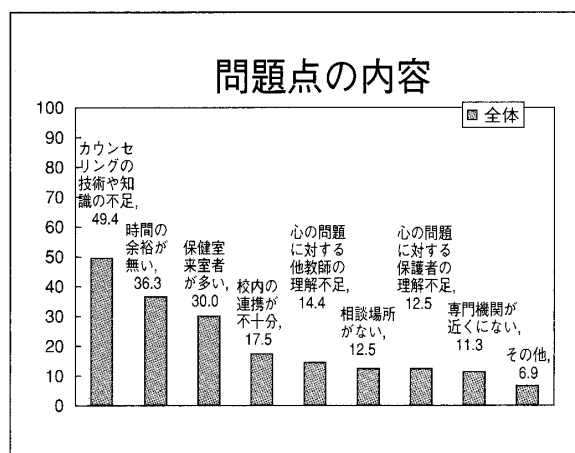


図10：問題点の具体的な内容

ここで、問題点の内容と、「適性感」や「自信度」との関わりについて見てみることにする。「問題点がある」と回答した160名のうち、「適性感あり」群は72名、「適性感なし」群は48名であった。「適性感あり」群であげられた問題点は、「カウンセリングの技術や知識の不足」・「時間の余裕がない」各29名（40.3%）、次いで「保健室来室者が多い」20名（27.8%）、「心の問題に対する他教師の理解不足」17名（23.6%）、「校内の連携が不十分」16名（22.2%）という順であった。それに対し、「適性感なし」群であげられた問題点は、「カウンセリングの技術や知識の不足」27名（56.3%）、次いで「時間の余裕がない」・「専門機関が近くにない」各15名（31.3%）、「保健室来室者が多い」14名（29.2%）という順になった。

「適性感あり」群と「適性感なし」群で比較したところ、「専門機関が近くにない」で適性感なし群が有意に高く（ $p < 0.05$ ）、「心の問題に対する他教師の理解不足」では、適性感あり群の方が有意に高い（ $p < 0.05$ ）結果となった（図11参照）。

次に、自信との関連を見たところ、「自信

あり」群であげられた問題点は、「時間の余裕がない」18名（35.3%）、次いで「保健室来室者が多い」17名（33.3%）、「カウンセリングの技術や知識の不足」12名（23.5%）という順であった。それに対し、「自信なし」群であげられた問題点は、「カウンセリングの技術や知識の不足」53名（64.6%）、次いで「時間の余裕がない」28名（34.1%）、「保健室来室者が多い」24名（29.3%）という順であった。

「自信あり」群と「自信なし」群とを比較したところ、「カウンセリングの技術や知識の不足」で、「自信なし」群が有意に高い（ $p < 0.001$ ）結果となった（図12参照）。

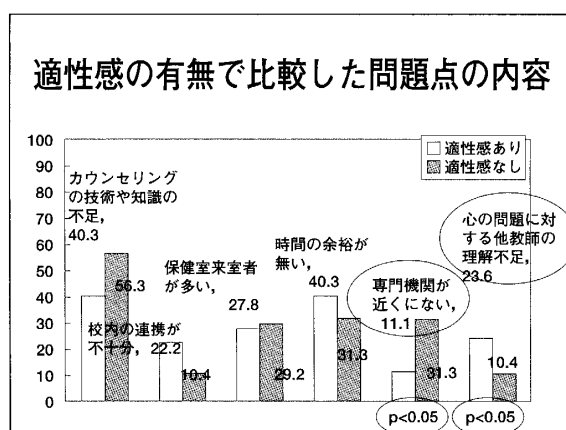


図11：問題点の内容と適性感の有無

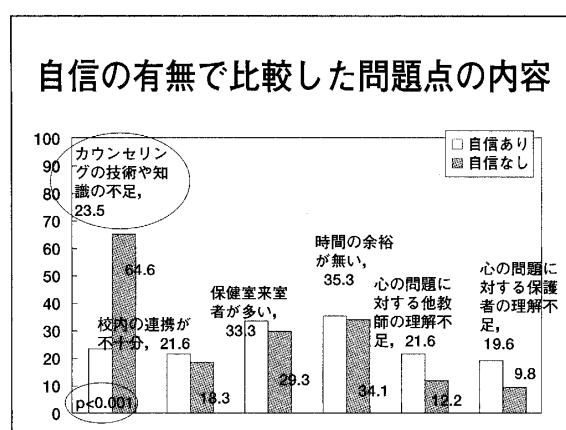


図12：問題点の内容と自信の有無

### 5. 健康相談活動に関する研修への参加

健康相談活動に関する研修への参加について聞いた結果が、図13である。「健康相談活動を行うために、健康相談活動に関する研修に参加したことはありますか」という設問に対し、「ある」と回答したのは161名(70.0%)、「ない」と回答したのは67名(29.1%)、無回答2名(0.9%)であった(図13参照)。研修に参加したことがあると回答したのは約7割であった。

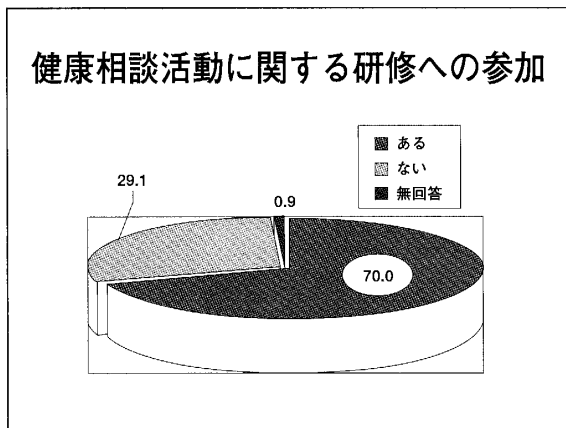


図13 研修への参加

研修の参加では、「適性感あり」群の養護教諭104名中、研修に参加したことがあるのは81名(77.9%)、「適性感なし」群の養護教諭54名中、研修に参加したことがあるのは39名(72.2%)であった。「適性感あり」群の方が、「適性感なし群」より有意に高い( $p < 0.001$ )結果となった(図14参照)。

次に自信の有無についてみたところ、「自信あり」群の養護教諭77名中、研修に参加したことがあるのは65名(84.4%)、「自信なし」群の養護教諭102名中、研修に参加したことがあるのは71名(69.6%)であった。

「自信あり」群の方が、「自信なし群」より有意に高い( $p < 0.001$ )結果となった(図

15参照)。

いずれも、「あり」群の方が、研修の参加が多い結果となった。

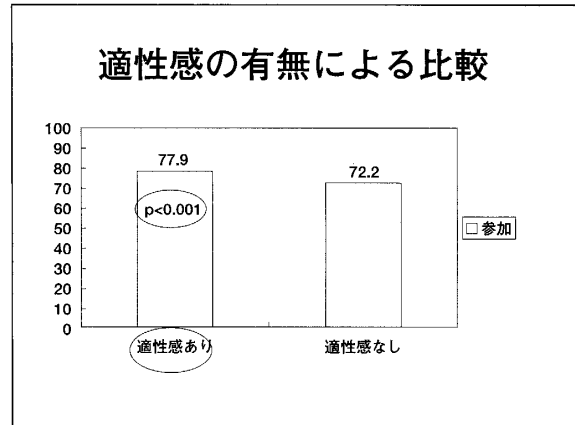


図14 適性感の有無でみた研修への参加

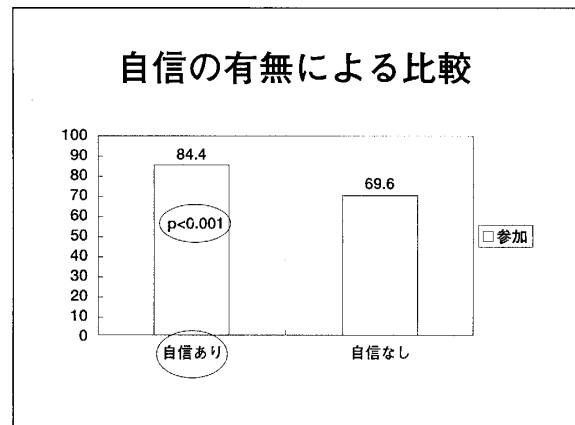


図15 自信の有無でみた研修への参加

では、参加した研修の内容については、どのような違いが見られるであろうか。

研修に「参加したことがある」と回答した161名に、「今までに参加したことのある研修はどのようなものでしたか」という設問で、12項目の中から複数選択させた結果、最も多く挙げられたのは、「カウンセリングの理論・技術について」117名(72.7%)、次いで「健康相談活動の事例検討に関すること」88名(54.7%)、「ロールプレイング」87名



(53.4%),「健康相談活動に関する講演会」61名(37.9%),「問題行動の観察と理解について」55名(34.2%),「心理学・心理療法について」47名(29.2%),「身体症状の理解・観察の方法について」42名(26.1%),「専門機関との連携について」41名(25.5%),「身体の発育発達について」33名(20.5%),「校内の組織や関係者との連携について」27名(16.8%),「学校保健学会等の学会」18名(11.2%),「その他」3名(1.9%)であった。「その他」では、「道立研究所の講座(教育相談)」、「教育心理相談士の習得」、「性教育」、「思春期に関する学会」等が挙げられた。

さて、「適性感あり」とした養護教諭の参加した研修内容をみると「カウンセリングの理論・技術について」59名(72.8%),「健康相談活動の事例検討に関すること」51名(63.0%),「ロールプレイング」45名(55.6%)という順になった。一方、『適性感なし』とした養護教諭の参加した研修内容をみると、「カウンセリングの理論・技術について」32名(82.1%),「ロールプレイング」20名(51.3%),「健康相談活動の事例検討に関すること」15名(38.5%)という順になった。

「適性感あり」群と「適性感なし」群を比較したところ、有意差が見られたのは、「健康相談の事例検討に関すること」で、適性感あり群の方が高い結果となった(図16参照)。

次に、自信と研修内容の関連について見た。「自信あり」とした養護教諭の参加した研修内容をみると、「カウンセリングの理論・技術について」48名(73.8%),「健康相談活動の事例検討に関すること」・「ロールプレイング」各42名(64.6%)という順になった。

『自信なし』とした養護教諭の参加した研修

内容も、「カウンセリングの理論・技術について」52名(73.2%),「健康相談活動の事例検討に関すること」34名(47.9%),「ロールプレイング」32名(45.1%)という順になった。

両群を比較したところ、「自信あり群」が「ロールプレイング」の研修について有意に高い結果となった(図17参照)。

これらのことから、適性を感じ自信を持っている養護教諭は「事例検討」や「ロールプレイング」などの実践的な研修への参加が多いといえよう。

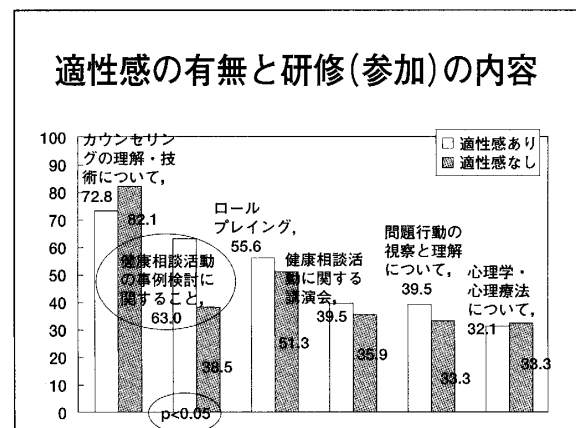


図16 適性感の有無でみた具体的な研修の内容

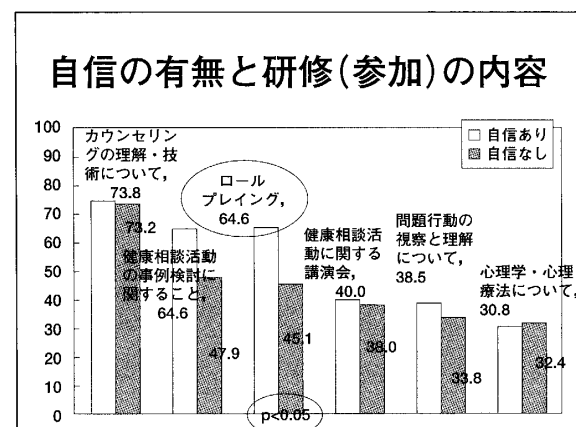


図17 自信の有無でみた具体的な研修の内容

## V. 考 察

本研究において着目した健康相談活動に対する養護教諭の適性感や自信についてみると、「適性」を感じている養護教諭は、全体の役5割にとどまり、「自信」がある養護教諭は3割余りという少なさであった。「適性」がありなおかつ「自信」のある養護教諭は、全体の3割弱であった。この結果は、自己評価であるため、自らを謙虚に評価する養護教諭の姿が推測される。また、「自信」のある養護教諭は「適性感」があるという、適性と自信の密接な関連がうかがわれた。

しかし、養護教諭の約半数が「適性を感じていない」、7割の養護教諭に「自信がない」ということは、専門職として考えた場合、どのような意味を持つのであろうか。

養護教諭は、「養護教諭とは、学校におけるすべての教育活動を通して、ヘルスプロモーションの理念に基づく健康教育と健康管理によって子どもの発育・発達の支援を行う特別な免許を持つ教育職員である。」と、その専門性および独自性が定義されている<sup>5)</sup>。

また、後藤研究(1988)では、「適性」を感じている養護教諭は約8割、「自信」を持っている養護教諭は6割余りであった<sup>6)</sup>。当時の調査から8年を経て、なぜ、養護教諭の適性感や自信はこれほど低下したのであろうか。

適性や自信に影響する要因を探るため、校種別あるいは経験年数別という調査対象者の属性や特性との関連に目を向けた。その結果、「適性」に対して、校種別・勤務年数別に見た結果、どちらについても有意な差は見られなかった。「自信」については、校種別

に有意な差は見られなかったが、20～30年の勤務年数の養護教諭が、有意に高い結果となった。適性がありなおかつ自信がある養護教諭は、校種別で差は見られなかったが、勤務年数5年未満の養護教諭は有意に低かった。これらのことから、養護教諭の適性や自信に対して、校種別や勤務年数はあまり影響しないが、「自信」については勤務年数5年を経過しないと自信を持ちにくく、勤務年数20～30年になると自信を持てる者が増加する傾向にあり、「経験」が自信につながるといえよう。

しかし、さらに30年を経過すると、また減少していたことから、経験年数が増えても、現在のような社会状況においては、これまで経験したことのない事例が新たに出てくるようになっており、対応に苦慮することがあるため、自信が持てないこともあるのではないかと考えた。

また、適性や自信に関わる背景要因を探るために、健康相談活動を進める上での問題点について分析した。

約7割の養護教諭が、問題点があると回答した。後藤研究(1998)において、心の問題への対応にあたっての問題点として多くあげられた項目は、「カウンセリングの技術の不足」、「相談時間が取れない」、「心の健康問題に対する他教師の理解不足」<sup>7)</sup>であった。今回の調査結果からも、「カウンセリングの技術や知識の不足」や「時間の余裕がない」、「保健室来室者が多い」など、相談にかける時間的ゆとりのなさが問題点となっているのがわかる。時間的なゆとりの無さは、同時に養護教諭の心のゆとりの無さにもつながり、子どもへの健康相談活動が質・量ともに不十

分になることが考えられる。

なお、問題点の有無と適性および自信との関連について見たところ、「適性なし」群の方が「問題点あり」とした者が多かったことから、適性感のある者は問題が生じても課題解決のための能力や方法を獲得しているということが考えられた。自信の有無では、問題点の有無に違いは見られず、自信の有無に関わらずさまざまな問題が生じることが推測された。

さらに、問題点とされることがらを具体的に見たところ、適性を感じ自信を持っている養護教諭では、「心の問題に対する他教師の認識や理解不足」に苦慮している人が多く、適性を感じない、自信を持ってない養護教諭は頼るべき専門機関の無さや自分自身の健康相談活動の基本的な技術や知識の不足で苦慮していることがわかった。適性感や自信の有無によって、問題とされる内容は異なり、適性感や自信のある養護教諭は問題の所在を他者に置いてその連携に関することがらを問題とするのに比べ、適性感や自信のない養護教諭は、むしろ自分自身に問題を感じているといえよう。

次に、適性や自信と研修への取り組みについてみた。研修への参加経験のある養護教諭は、全体の約7割を占めており、多くの養護教諭に研修経験があった。しかし、後藤研究(1998)と比較すると、研修経験が9割であった<sup>8)</sup>の)に比べ、本調査結果では7割と少なくなっており、研修への参加率も全体的に低下していることがわかった。

その研修への参加率は、「適性感あり」群の方が「適性感なし」群よりも、「自信あり」群の方が「自信なし」群よりも高い結果と

なった。「研修への参加が多いほど養護教諭は適性と自信を獲得できる」という短絡的な見方はできないが、研修への参加と適性および自信の獲得とに関連性があることが推測できるのではないかと。

研修の内容に着目すると、「適性感あり」群の方が「健康相談活動の事例検討に関すること」への参加率が有意に高く、「自信あり」群の方が、「ロールプレイング」への参加率が有意に高かったことから、適性があり自信のある養護教諭は、より実践的で活動的な研修への参加に熱心であるといえよう。

養護教諭の適性感や自信は、校種や勤務年数によって自然に高まるものではなく、養護教諭自身が問題意識や研究の経験を持つ中で、培われることが示された。

また、適性感や自信によって実践的な力が養われ、より具体的な健康相談活動が展開されることが推測できる。そして、その健康相談活動の効果を得ることによって、適性感や自信はより高められるのではないかと。

つまり、本研究によって、養護教諭は、ある程度勤務年数を積むことで自信を持つようになるが、適性や自信はむしろ養護教諭が自ら取り組む能動的な活動の中で培われるものであることが示された。その中の一例が研修経験であり、研修によって適性や自信につながる可能性も考えられた。

しかしながら、養護教諭の適性感および自信の低下が顕著であり、養護教諭は、難しい時代に直面しているといえよう。これまで、健康相談活動に関わる養護教諭の力量形成のための優れた研究が多い<sup>9)~17)</sup>が、養護教諭の現状を把握した上で、今後は現職養護教諭への支援が必要なのではないだろうか。

## VI おわりに

今回の調査では、対象とした養護教諭の半数以上が健康相談活動に対する適性感の欠如や自信のなさをあげており、現代の学校教育の中での養護教諭の執務の難しさや養護教諭のとまどいを深く感じる事となった。しかし、専門職であるという原点に立ち、一人ひとり養護教諭の意識の向上と研修の経験が、子どもの幸せを可能にすることを信じ、邁進していくことを願わずにいられない。同時に、現職養護教諭の研修への支援や充実した卒後教育が必要であると思われた。

なお、本研究の一部は、第40回北海道学校保健学会（2005）において発表した。

### 謝辞

お忙しい時期にもかかわらず、調査にご協力いただきました、養護教諭のみなさまに、心より感謝申し上げます。

### 引用文献

- 1) 大谷尚子・森田光子：養護教諭必携シリーズNO2, 養護教諭の行う健康相談活動, 東山書房, 2000, p.10
- 2) 三木とみ子：「養護教諭（養護訓導）の『職』としての『養護』」, 三木編；養護概説三訂, ぎょうせい, 2005 pp.2～5
- 3) 前掲書2) 三木とみ子：教育職員養成審議会と教育免許法・同施行規則の改正」, 2005, pp.18～26
- 4) 後藤ひとみ：養護教諭が行う相談活動に関する一考察 - 適性感と自信度を中心に -, 日本養護教諭教育学会誌, vol.2, 1999, pp.55～66
- 5) 日本養護教諭教育学会理事会：「Yogo teacherの英語説明文」の検討報告, 養護教諭教育学会 第11回学術集会収録集, 2003, pp.36～37
- 6) 同上
- 7) 同上
- 8) 同上
- 9) 森田光子他：相談に関わる養護教諭の力量形成 第1報, 日本養護教諭教育学会誌, vol.2, 1999, pp.3～38
- 10) 森田光子他：相談に関わる養護教諭の力量形成 第2報, 日本養護教諭教育学会誌, vol.2, 1999, pp.39～45
- 11) 大原榮子他：相談に関わる養護教諭の力量形成 第3報, 日本養護教諭教育学会誌, vol.3, 2000, pp.47～59
- 12) 塩田瑠美他：相談に関わる養護教諭の力量形成 第4報, 日本養護教諭教育学会誌, vol.3, 2000, pp.60～71
- 13) 吉田あや子他：相談に関わる養護教諭の力量形成 第5報, 日本養護教諭教育学会誌, vol.3, 2000, pp.72～86
- 14) 竹田由美子他：相談に関わる養護教諭の力量形成 第6報, 日本養護教諭教育学会誌, vol.4, 2001, pp.59～68
- 15) 竹田由美子他：相談に関わる養護教諭の力量形成 第7報, 日本養護教諭教育学会誌, vol.5, 2002, pp.39～49

The Ability of Health Consultation Activity by the Yogo Teacher : From the view point of aptitude and confidence for Health Consultation Activity

Yoko IMANO

**ABSTRACT**

This study is based on a questionnaire given to yogo teachers of elementary, junior high and high school, surveying consideration for health consultation activity.

The following results were obtained.

1. 30% of yogo teachers investigated indicated an aptitude and confidence for health consultation activity.
2. Yogo teachers demonstrating an aptitude and confidence were learning health consultation activity positively.

In order to improve the yogo teacher's abilities of health consultation activity abilities in the future, it is necessary to support for yogo teachers.

**Key words :** Yogo teacher, health consultation activity, aptitude, confidence